

高等学校倫理における生命倫理教育の研究

武藤 貴史

1. 論文構成

序章 問題の所在と研究の目的

第1節 問題の所在

第2節 研究の目的と方法

第3節 論文の概要

第1章 生命倫理教育の現状

第1節 生命倫理と生命倫理教育の定義

第2節 高等学校倫理と生命倫理教育

第2章 生命倫理教育の類型化

第1節 生命倫理教育の先行研究の分析・考察

第2節 生命倫理教育の分類

第3章 生命倫理教育の先行実践の検討

第1節 自己探求的アプローチの先行実践の分析・考察

第2節 社会問題探求的アプローチの先行実践の分析・考察

第4章 高等学校倫理における生命倫理教育の授業実践計画

第1節 「動物利用の倫理」を取り扱う意義

第2節 「動物利用の倫理」を取り扱う授業実践計画

終章 研究のまとめと今後の課題

第1節 研究のまとめ

第2節 今後の課題

参考文献一覧

2. 問題の所在と研究の目的

(1) 問題の所在

近年、青少年のいじめや自殺、動物虐待、凶悪犯罪などが後を絶たない。筆者は、現代の子どもたちがこのような事件や問題を起こしてしまっている状況だからこそ、学校教育において命について考えたり、学んだりする機会が必要なのではな

いかと考えている。

そこで、筆者は社会科、地理歴史科、公民科の場合、生命倫理教育が重要になるのではないかと筆者は考える。脳死や臓器移植、出生前診断、クローン人間などといった生命に関わる様々な倫理的問題を題材として授業を展開していくことができるため、命について考え、自他の命の大切さについて理解する機会を十分に設けることができるからである。

生命倫理教育は、その中でも特に高等学校公民科倫理において行われていくべきである。従来の倫理の学習は、原宏史氏が指摘するように価値観形成のための過程にはなっておらず、思想史学習に陥りがちである¹。しかし、生命倫理教育は生命に関する倫理的問題を多面的・多角的に考察することで、生徒一人ひとりの人生観、価値観の形成に繋げることができるものである。そういった点において、生命倫理教育は高等学校公民科倫理で行われていくべきであると言える。

しかし、生命倫理教育が行われる場合、以下の問題点が挙げられる。

一点目は、命の大切さを伝えることができない可能性があるということである。大谷いづみ氏は生と死の授業のまとめとして、新聞記事を題材に小論文を課した答案の中に、「生命の質が低くなってきた者が、自ら死を選ぶべきだと考えるように援助することこそが進化した社会である。」と論じたものを発見し、大変驚愕した²という。このように、命の大切を伝えることができない場合があるのである。

二点目は、生命倫理に関わる問題を取り上げる際に、賛成か反対かを問うような授業が非常に多いということである。是非かを問う授業で果たしてよいのだろうか。そのような授業では、生徒に生きるか、死ぬか、生かすか、殺すかという答えを強要することに他ならないのではないだろうか。生命に関する倫理的問題は、賛成か反対かの単純な二項対立にとどまることなく、もっと多様な答えが存在して

よいはずである。よって、授業においても賛成か反対かの二つの選択肢しかないというのはおかしなことである。

(2) 研究の目的と方法

本研究の目的は、生命倫理問題を是か非かで問う授業を乗り越え、命の大切さを理解させることができ、生徒にとってよりよい高等学校倫理における生命倫理問題を題材とした授業を構築するためにはどうすればよいのかを明らかにすることである。

本研究の目的に至るために、まず生命倫理教育の現状について考察する。そのために、生命倫理、生命倫理教育の定義付けを行う。そして、生命倫理教育がなぜ必要とされるのか、高等学校倫理においてどのような意義があると言えるのかを明らかにし、高等学校学習指導要領、教科書の分析・考察を行い、評価できる点や課題点を明らかにする。

また、生命倫理教育の先行研究の分析・考察を行い、これまでの生命倫理教育の研究における評価できる点や課題点を明らかにし、それをもとに生命倫理教育の類型化を行う。

さらに、これまで行われてきた優れた授業実践の分析・考察を行い、どのように授業を展開していけばよいのかを明らかにする。

そして、どのようにすれば、生徒に命の大切さを理解させることができ、よりよい生命倫理問題を題材とした授業にすることができるのかを筆者が構築した授業で示す。

以上が、研究の目的と方法である。

3. 論文の概要

(1) 第1章

第1章では、生命倫理教育の現状を明らかにした。

第1節では、生命倫理と生命倫理教育の定義付けを行った。生命倫理の定義付けを行うために、生命倫理という言葉が生じる過程を分析・考察し、さらには“bioethics”の定義などを検討した。その結果、生命倫理という言葉は生命に関する特定の倫理規範であり、生命に関する倫理的問題を扱う学問でもあるということを指摘した。そのため、生命倫理を時

代が移り変わり、社会や文化が変化しても普遍的な生命に関する倫理規範のこととし、生命倫理学とは、生命に関する様々な倫理的問題について、様々な方法を用いながら考察し、生命に関わる行為の判断の基準を示すために行われる学問や研究のこととした。以上のことを踏まえ、生命倫理教育、いのちの教育、生と死の教育、それぞれの特性、さらにはダリル・メイサー氏が掲げる生命倫理教育の目標を分析・考察し、生命倫理教育の定義付けを行った。そして、生命倫理教育を多様な学問分野の知識を獲得すること、意思決定を行うための多面的なスキルを獲得すること、道徳性を発達させることを目標として、生命に関する様々な倫理的問題を多面的・多角的に考察させる教育と定義した。

第2節では、生命倫理教育がなぜ必要とされるのか、高等学校倫理においてどのような意義があると言えるのかを明らかにした。そして、高等学校学習指導要領及び解説の分析・考察を行い、様々な生命倫理問題を扱うことができること、論述や討論などといった学習活動が求められていることが明らかになった。そこで、どのような内容が取り扱われているのか、どのような問いが記述されているのかを視点として、教科書の分析・考察を行った。その結果、以下のことを問題点として指摘した。一点目は、学習指導要領で論述や討論などといった学習方法が求められているが、教科書において、そのために設けている問いが、是非を問うようなものばかりであったことである。二点目は、扱われている内容が脳死や臓器移植など話題性のあるものばかりであり、偏りがあるため、『高等学校学習指導要領解説 公民編』で求められているような学習活動が期待できないことである。

(2) 第2章

第2章では、生命倫理教育の類型化を行った。

第1節では、これまでの生命倫理教育の先行研究の分析・考察を行った。原宏史氏の先行研究に対しては、人格同一性の視点を生命倫理教育に取り入れるべきであると主張しながらも、その理論を明らかにしていないということを課題点として指摘した。大谷いづみ氏の先行研究に対しては、生命倫理問題

を是非かで問うことの危険性を指摘しながらも、どのように授業を構築していけばよいのかを明らかにしていないということを課題点として指摘した。石原純氏の先行研究に対しては、生命倫理教育の授業実践を収集し、類型化を行い、その授業理論を明らかにしたことは評価できるが、収集した授業実践が少なく、それぞれの類型の特質が明らかになったとは言えないのではないかとすることを課題点として指摘した。

第2節では、生命倫理教育の授業実践の類型化を行った。石原氏は、方法論と内容構成という視点から生命倫理教育の類型化を行っている。筆者が授業実践を『歴史地理教育』や『都倫研紀要』などから収集した結果、自己の在り方生き方に結びつけて探求させる授業と社会の問題として探求させる授業とに大きく分かれるということが明らかになった。そのため、石原氏の方法論の視点から、授業実践を自己探求的アプローチ、社会問題探求的アプローチに分類することを支持することにした。石原氏は内容構成の視点からも分類しているが、筆者は授業で扱う生命倫理問題によってその特質は異なると考えたため、授業内容そのものに着目して、生命倫理教育を生の終わりである死に関連する生命倫理問題を取り扱う「死の倫理」、臓器移植に関連する生命倫理問題を取り扱う「臓器移植の倫理」、新たな命が誕生することに関連する生命倫理問題を取り扱う「生殖の倫理」、動物の利用に関連する生命倫理問題を取り扱う「動物利用の倫理」、生物工学の分野に含まれる生命倫理問題を取り扱う「生物工学の倫理」、病気や様々な健康被害に関連する生命倫理問題を取り扱う「病の倫理」というように類型化を行った。そして、それぞれの類型にはどのような特質があると言えるのかを収集した授業実践を自己探求的アプローチ、社会問題探求的アプローチに分類し、分析・考察を行った。

(3) 第3章

第1章第2節の学習指導要領の分析・考察から、生命倫理問題を通して生きることの意義や社会の在り方を考察させるべきであると指摘した。そのため、自己探求的アプローチ、社会問題探求的アプローチ

による授業を組み込んだ単元が必要であると述べた。そこで、第3章では授業を構築する際に参考となる授業を自己探求的アプローチ、社会問題探求的アプローチによる授業をそれぞれ取り上げ、分析・考察を行った。

第1節では、自己探求的アプローチの授業を構築する上で手掛かりとなる古田晴彦氏、原宏史氏の授業実践を取り上げ、分析・考察を行った。古田氏の授業実践に対しては、授業で対話の中で意見を交流させたり、議論を行ったりするべきであること、生徒の考えを整理する時間が短かったことなどを課題点として指摘した。原氏の授業実践に対しては、その授業が抽象的すぎる内容であるため、難解なのではないかということを課題点として指摘した。また、古田氏、原氏の授業実践の分析・考察を通して、自己探求的アプローチでは生徒の考えを揺さぶり、自身の考えを整理する時間をしっかり与えることで、自己の価値観形成に繋がる授業となることを指摘した。

第2節では、社会問題探求的アプローチの授業を構築する上で手掛かりとなる吉村功太郎氏、石原純氏の授業実践を取り上げ、分析・考察を行った。吉村氏の授業実践に対しては、単元を通して問われていることは生命倫理問題の是非かについてであるということ課題点として指摘した。石原氏の授業実践に対しては、生徒が主体的に知識を獲得したり、議論を行ったりする場が少ないということ課題点として指摘した。吉村氏、石原氏の授業実践の分析・考察を通して、社会問題探求的アプローチでは是非かを問うのではなく、賛成と反対の背後にある価値観や社会状況などを問うべきであるということ、またダリル・メイサー氏の三原則を取り入れることで、論点が明確となり、議論を深めることができることを指摘した。

(4) 第4章

第4章では、第1章から第3章までの分析・考察を踏まえて、高等学校倫理における自己探求的アプローチ、社会問題探求的アプローチによる授業を構築した。

第1節では、第2章で行った類型化より「動物利

用の倫理」を題材とした授業を構築することの意義について述べた。「動物利用の倫理」を題材にすることにより、従来あまり取り扱われることのなかった動物の命に目をむけることができるため、人間の命だけでなく、他の生命を尊重する姿勢を育むことができ、他のすべての生命との調和的な共存関係を築くことが大切であることを理解させることができる。また、動物を利用することは生徒にとっても大変身近なことであるので、興味・関心や問題意識を高めることができる。以上のようなことを「動物利用の倫理」を取り扱う意義として述べた。

第2節では、第3章における先行実践の分析・考察を踏まえ、「動物利用の倫理」を題材として、自己探求的アプローチ、社会問題探求的アプローチ、それぞれの授業を構築した。自己探求的アプローチの授業では、動物の画像や新聞記事から人間は生きていく中で動物を様々な形で利用していること、そして動物の命を巡る様々な問題が生じていることに気付かせ、我々にとって動物の命とはどのような価値をもつのかを動物の命を巡る様々な思想を手掛かりに思索を深めることができるようにした。社会問題探求的アプローチの授業では、動物実験についての基本的知識を獲得し、日本では動物実験を巡ってどのような現状にあるのか理解させた上で、なぜ動物実験は肯定派と否定派に対立しているのかに迫り、その上で動物実験は今後どのようにあるべきなのかを考察させた。以上の二つの授業を通して、生徒が動物を始めとした様々な他の生命との関わりの中で生きていることを認識し、さらに人間だけでなく、すべての生命を尊重し、他の生命との調和的な共生関係を築くことが大切であることを理解できるようにした。

4. 今後の課題

本研究の今後の課題として、三点挙げる。

一点目は、生命倫理教育においてどのような資料を用いることが効果的なのかを明らかにしきれなかったことである。第3章の先行実践の検討から、生命倫理問題は生徒にとって身近ではないものが多い

ので、当事者の証言を知ることができ、生徒の考えを揺さぶることができる視聴覚資料や文学作品が効果的であることを述べたが、その他の側面からも視聴覚資料や文学作品などを考察すべきであったし、その他の資料についても検討する必要がある。

二点目は、生命倫理と密接な関係にある環境倫理について、深く掘り下げて研究することができなかったことである。環境倫理についても、先行研究や先行実践を収集し、分析・考察を行うことでよりよい生命倫理教育を明らかにすることができたと考える。

三点目は、海外の生命倫理教育の先行研究にあたり、分析・考察をすることができなかったことが挙げられる。ダリル・メイサー氏の先行研究については本研究の中でも分析・考察することができたが、原宏史氏の先行研究にもあるようにイギリスなどダリル・メイサー氏以外の先行研究についても分析・考察すべきであった。海外の先行研究についても分析・考察することで、さらに生命倫理教育の新たな可能性を見出すことができるからである。

以上が、本研究の課題であるが、その他にも残された課題は多々ある。今後も引き続き研究を行い、命の大切さを理解させ、生徒にとってよりよい生命倫理教育の授業をどのように構築し、展開していけばよいのか、それを深め続けていきたい。

¹原宏史「高等学校倫理における「生」と「生殖」の取り扱いを考えるー生殖補助技術と出生前診断を中心にー」愛知教育大学教育実践総合センター編『愛知教育大学教育実践総合センター紀要』8号 愛知教育大学教育実践総合センター、2005年、213頁。

²大谷いづみ「生と死の語り方ー『生と死の教育』を組み合わせるために」川本隆史編著『ケアの社会倫理学 医療・看護・介護・教育をつなぐ』有斐閣、2005年、340頁～341頁。